

町歩が与えられる筈だつた。いろいろの花が咲き乱れ、丘の上にはノロ（満州鹿）が七、八頭位群れをなして現れ、それを討つて食料とし、楽しい生活だつたが、夫昌一さんは二十五年五月十三日、現地召集でハイラルに入隊、八月二十八日帰宅。日本が降服したと知つた満人は暴民と化し何度も部落を襲つたので、その都度山に逃げた。終には食料、タンスから家財道具一切まで略奪され、九月四日、ソ連軍が進駐してきたので、十六才以上六十五才迄の男は徵用、男は戦つて死ぬから、女子供は自決せよとの本部からの命令で、かねて医師に若しもの時にはと作つてもらつておいた毒薬を九月五日未明、部落全体一ヶ所に集り、団員四十二名、味噌汁に入れて飲んだ。スイさんの子供二人は死んだが、自分他数人は死にきれず、金州より汽車で南下し集合所に入ったが、集合所は発疹チブスで多数死亡し、二十一年八月十五日、日本人解放令が出、日本人会の手配でハイラルより帰り佐世保に上陸。故郷に帰れたのは二十二年五月帰国した夫も入れて、部落全体で六名だけだつた。このスイさんは生きている限り、慚愧の思いに苛まれるのかと思うと慰めの言葉も出なかつた。ただ仏前に手を合わせ、一心に般若心経を心中で唱え、お宅を辞した。

君も吾も共に老ゆれば聞き書きの
むずかしさ知る今日しみじみと

私が戦後の六十一年、どうしても心から離れないのは、昭和二十年の八月、樺太からの電話交換手の「敵兵が窓の所まで迫つて来ました。これで通信は終わります。私達は自決します。日本の皆さん、さようなら」のラジオ放送だつた。何とこの事が知りたいと思い続けて来た。

そして疎開学童が二十年十月二十三日、それぞれの家族や先生に守られて帰つた後、待つていた様に警察から引揚げと戦災の方々を入れる様にとの達しがあり、早くとせかれても当時材料もなく、簡単な修理をし、十畳一間と畳の廊下五畳を一家族分として十三家族が入つた。本当の仮住居だつた。真先に入られたのは、樺太上敷香から引揚げの馬場さん御一家だつた。国境近くの上敷香には日本の師団があつたらしい。昭和十六年四月日ソ中立条約有効期間を五年とし中立有功、領土保全、不可侵条約を締結したのに、昭和二十年四月条約不延長を通告、八月に対日宣戦を通告し九日にソ連軍は進行を始め、ソ満国境へ、一方樺太には西海岸から上陸となつたらしい。男だけ残し、女子供はすぐに南下して引揚げる様にとの命令だつたとの事で、軍の用意した無蓋車で早く南下し、軍の船で北海道稚内に渡られ、お母さんキヌイさんの故郷永井野村屋敷に一時落ちつかれたとか。

当時の私は姑の命ずるまま働く一方で家に入られた方々の状況もよく知らなかつた。馬場さん御一家はお母さんと会津高等女学校に編入された洋子さん、保栄さん、英子さん、保子さんの一家五人で、とても素直で明るく羨ましい様なお子さん達で、私の子供達もとてもお世話になつた。五年近くも吾が家にいられ、洋子さんは卒業後高田町役場に勤められたが、北海道に居られたお父さんが迎えに来られ、北の宗谷管内に行かれたと聞いた。國らずも昨年町会議員の小林勇三さんの奥さんのきち子さんの御好意でファミリーレストラン「杜」で馬場さん御姉弟妹四名の方々に五十七年ぶりにお逢い出来た。「時間ない」とおつしやるのに、私は懐かしさのあまりに一人でしゃべり続け、随分御迷惑をおかけして申し訳なく思つてゐる。洋子さんの札幌の御住所と電話番号を教えていただいたのが役に立ち、終戦の引揚の